

平成22年度 北陸技術士懇談会

第2回 技術研修会報告

北陸技術士懇談会の平成22年度 第2回技術研修会が平成23年2月26日(土)に金沢勤労者プラザで行われました。

通常であれば1月の開催なのですが、産学官の合同セミナーが11月にありましたので、第1回が12月となり、更に第2回も同様にずれこんでの開催となったものです。

北陸技術士懇談会でも女性の技術士が増えておりますが、今回はこの方々のネットワークを通じて、女性技術士が中心となって企画、立案したもので、パネラーの方々も女性が多く、大変活発な議論が展開されたのではないかと感じました。

■屋敷会長の挨拶

最近の科学技術の後退が日本経済にどんな影響を与えるのか、コンピュータの分野を例に取り説明され、日本のコンピュータの演算速度が中国に抜かれ、今や世界の四位に転落しました。これは何を意味するかというと、この計算技術を世界に売り込むことができなくなったということで、技術立国で成り立っている日本に取っては深刻な問題であると問題視し、我々会員も技術の研鑽に励むためには、先ず日本技術士会の組織に入会して、個人の技術の研鑽に励んでほしいということを強調されました。

■技術研修会内容

①基調講演：「県民協働による森林再生（神奈川県丹沢山地の取り組み）」

木平勇吉 講師（東京農工大学名誉教授）

丹沢地域は大都会に隣接して、人間社会の弊害をまともに受けている。にもかかわらずここには大型動物が多数生息しているが決して動物にとっては良い生息環境ではない。なぜならここは関東地震の影響をまともに受け、今、山はぼろぼろに崩壊しています。この崩壊に更に追い打ちをかけたのが、1950年頃からの経済成長である。エネルギー革命により薪がいらなくなり、山の魅力が薄れ、森林管理の放棄とそれに伴う生態系の攪乱が起り、山は荒廃していった。このため、これらを調査してデータ化することにより山の荒

廃の進み具合が明確になり、何とかしなければということで、協働意識が生まれ、5年間の時限立法ではあるが環境税まで創設され、40億の予算が成立した。この資金の使い道についても、地域住民が一体となって立案・実施・評価することにより効果的に使えることとなった。このようにできたのも、今までの調査結果のデータ化の蓄積によるものであると結論づけられた。また、これからの丹沢地域の自然再生の課題としては、ブナの再生、人口林の再生、シカの食害対策、針葉林と落葉林の混栽の推進、地域社会の再生等があげられるが、これらも調査を行い、評価しデータ化することによって更に、新しい再生課題を立案することができるものであると結論づけられた。

この基調講演の後、質疑に移りましたがその主なものは次のようなものでした。

Q、石川県は竹が繁茂して山が荒れている。また間伐率が全国一律の40%で雪害が起っている、良い対策はないか。

Ans、竹の繁茂は山の管理をしなくなったのが原因である。また、間伐率は雪の多い長野では15%位でやっており現場の声として、大きな声を出す必要がある。など他に多くの質問が有りました。



これよりパネラーの3人の主張をそれぞれ行った後、パネルディスカッションに移りました。

森林から環境を考えると題して

広田 史子（富山県新川農林振興センター技術士）

森林・林業の県職員として行政の立場から意見を述べられました。

森林から環境を考えると題して4つの提言をしている。

1. 森を生かす→森作りで持続可能な林業経営を図る。
2. 木を使う→利用促進で流通の低コスト化を図る。
3. 人を育てる→ボランティアを支援して林業分野の人材育成を図る。
4. 山を守る→地域住民による森林の適正な管理を行い、山村生活の活性化と防災対策を図る。

これらを基本に地域住民、関心のあるボランティア、財産として保有する林業者が協力することが必要である。国内自給材の50%を達成するためには、今、いろいろな問題がある。例えば、山の境界確認作業、サルによる食害(富山県新川地方では84類2,400頭が生息)対策、植樹活動等ありますがこれらの、一つ一つの問題点の解決に向けた努力をしている。そのためには計画して役割分担、検証し、誰が何をするかにより、企画・運営・管理が出来る人材の育成、渉外・調整担当、専門的技術指導者、熟練作業員、レクリエーションリーダーの育成が可能となり、これらが連動して計画→役割分担→それを担う人材があって始めて、県民の満足度が高められるのではないかと述べられました。



森田 由樹子 (株)エコロの森 代表取締役)

旅行企画会社社長として、人が森林を活用している事例として森林セラピーの取り組みを紹介されました。その主旨は、森林セラピーとしての効用は

1. リラクゼーション効果。
2. 免疫機能の改善。
3. 予防医学的効果を期待するものがある。

この森林セラピーとは、医学的エビデンスに裏付けされた森林浴効果のことで、森林環境を利用した心身の健康維持・増進・疫病の予防を目的と

するもので、そのための基地が必要である。この森林セラピー基地は全国で、現在42ヶ所指定されており、北陸では2009年に立山山麓森林セラピー基地が認定された。エコロの森では参加者に自分の木を決めて、木と対話する十分な時間を設けている。特に冬の樹木の冬芽は面白い造形を呈しているのので、スノーシューを付けて、ゆっくりと自分の時間を過ごす工夫をしている、とお話をされました。

西口 賢利 (福井県森林組合連合会)

低コスト化に向けた木材の生産・流通体制について福井県に於ける、木材利用の現場で仕事をする立場として、木材資源の有効活用のための流通・販路システム構築の取り組みの事例とその現状を述べられました。

福井県には現在28,000人の山の所有者がいますが、管理する作業員は400人に過ぎない、人工林は12万haとなっている。これらの管理を少しでもカバーするため、福井県の森林・林業を元気にするプロジェクトを作っている。たとえば集落林業プロジェクト、県産材活用プロジェクト・間伐材活用プロジェクトである。また、流通面に於いても市場方式から新生産木材流通システムに変わり、これは山のストックヤードで競りにかける方式に変ってきている。また平成18年3月に共同出荷組合を作り、流通面の簡素化を行い、高値安定化を図っている、と云う現状を述べられました。



これよりパネルディスカッションに移りました。

Q1

3人に質問します、現在うまくいっていますか、それともいっていませんか。

Ans

広田さん→45%位アタックしているが技術力が不足していると感じています。

森田さん→儲かっていないが、疲れた都会の人が少しでも元気になれば良いとの思いでやっています。

西口さん→安定供給して、少しでも地権者に還元出来ればありがたいが、組合により差が大きい。

Q 2

それぞれのパネリストの問題解決の方法を教えてください。

Ans

広田さん→現場に出て山を見る力、人を見る力を養い、問題点の解決を図る方策を見いだす努力をしています。

森田さん→山や森の魅力をネットをはじめ、いろいろのメディアを使い、情報発信をしたい。また、森林セラピーの魅力を伝えたい。

西口さん→組合にも大小あるので、どう云うふうに橋渡しをするかが課題です。

Q 3

経営規模拡大のため、隣接山地を購入しようとしたら、共有地のため所有者全員の同意が得られず、断念しましたが何か良い方法はないものでしょうか。

Ans

共有地などは全員の同意が無くても良い方向で、現在、法案作成に向け審議中とのこと。

Q 4

外国の方が日本の森林を買っていると云うが、何が問題ですか。

Ans

どこの人ということではなく、管理する能力のない人が山を持つことに問題があると思います。

2011年は国際森林年です、国土の7割が森林である日本では、森林が持つ機能は、木材資源としての利用、土壌の保全、水源の涵養、生物多様性の保全、温暖化防止など非常に多様です。しかし、一方で担い手の高齢化や木材利用の減少により森林が荒廃するなど、大きな問題を抱えています。貴重な山の置かれている現実をあまりにも知らなすぎたのではないかと、今日の研修会を通して少しでも理解することが出来たのがせめてもの救いである。また、今回の研修会はオープン形式

のため、一般市民の方々の参加も多く、研修会の参加者は65名近くに達し、環境問題の関心の深さを感じました。

■交流会

研修会の後に講師を交えた懇親会も開催いたしました。こちらの方も多くの方々に参加頂きありがとうございました。

今回は女性や若い人の参加が多く、にぎやかな感じがいたしました。その為か、料理のなくなるスピードも速く、1時間も持たなかったようです。十分食べられなかった方、申し訳ありませんでした。

文責：事業委員 今成康忠（石川）